変わらぬ希望を分かち合いたい

「心ある人々の真心を集めて力とし、最後まで踏みとどまって事実を見つめ、変わらぬ希望を分かち合いたいと考えている。先は長い。」

——中村 哲（ペシャワール会報74号・2002年より）

地球温暖化に更なる危機感を

——PMSの活動とアフガンの現状

PMS（ピース・ジャパン・メディカルサービス）総院長／ペシャワール会会長　村上 優（まさる）

はじめに

中村哲医師による現地活動は一九八四年に始まりました。四〇周年を迎えた今年の六月には、中村医師が現地から送り続けた報告（会報）の集大成である『中村哲　思索と行動』の下巻を刊行することができました。次の十年、さらには次の十年をも見据えるとき、この著書は私たちを導く指針となります。

活気あふれるPMSの活動地

中村医師逝去後も、PMSによる医療、農業、灌漑（かんがい）用水路事業は、中村医師が今も直接牽引していると思えるほど、以下のように精力的に続けられています。

・クナール河からの灌漑としてバルカシコート堰（せき）と用水路を二〇二二年に完成。

・ナンガラハル州南部のスピンガル山脈谷間の中小河川の灌漑事業として、バラコットの堰・用水路・貯水池（溜池）を二〇二四年に完成。

・現在、同州ナージアン地区でモラヘイル用水路改修工事を進行中。

マルワリード用水路をはじめ、これまでに造られた十一の堰は修理を重ねて地元に定着し、灌漑面積は二万ヘクタールを超え、植樹も一三一万本以上となって緑が茂っています。こうした地域では小麦をはじめとする穀物や季節の野菜、サトウキビなどが収穫され、街は自活できるようになった人々の活気であふれています。かつての農業立国アフガニスタンの復活が期待できる風景です。

ダラエヌール診療所は地域の人々の信頼を得て多忙を極めています。さらに、中村医師が心血を注いで構築したハンセン病治療体制の復活に向けての調査・模索も始まっています。

温暖化の脅威

しかしながら、アフガニスタン全体を見ると、農業が復興しているＰＭＳの活動地は例外的と言えます。二〇〇〇年から顕在化した干ばつが進行しているからです。ＷＦＰ（世界食糧計画）は二〇二〇年から現在まで、干ばつは最悪の経過をたどっていると警告しています。

降雪・降雨量の低下、時として起きる局地的豪雨・洪水は干ばつを進めます。五千ｍ強をピークとするスピンガル山脈の山麓などで以前には見られた夕立による水の循環も少なくなったようです。最大の要因は気温上昇です。

増水したクナール河とPMSが造ったミラーン堰（2024年8月19日）

二〇二四年は前年より少雪・少雨でしたが、ＰＭＳの活動地では二月に一定の降水があり、四月初旬には洪水被害が報道されるほどの豪雨がありました。しかし、その後またごく少雨となっています。ＰＭＳでは、活動地に設置した九ヵ所の簡易雨量計で年間を通してのデータを蓄積している段階です。

二〇一九年、ネパールにある国際総合山岳開発センターは、ヒンドゥークシュ・ヒマラヤにある氷河は今世紀末には六四％が消失すると報告しました。夏場にゆるやかに融ける氷河や高山の積雪に頼って農業が行われているアフガニスタンでは、氷河や雪がなくなることは死を意味します。

今年はクナール河の水位が四月に例年よりも急激に高くなり、その高さを維持しています。河の色は茶色ではなく、濁りの少ない灰色なので、雪解け・氷河融解による増水であることがわかります。世界的な氷河の崩壊が、ここクナール河にも影響を与えているのです。クナール河の水位が異常に高くなると取水が困難になる虞（おそ）れがあるので、注意深く観察していかねばなりません。

生き残るための現実策を

中村医師が繰り返し訴えた地球温暖化による気温上昇について、我々はもっと危機感と現実感を持つべきです。ペシャワール会報一二一号（二〇一四年十月）に中村医師は「慢性的な気候変化はニュースの死角で、多くの人々にとって死活問題であるにもかかわらず、その重大性の割に今後も殆ど話題にならないだろう」と嘆きつつも、分析・評価、そして将来への提言を記しています。「素人の推測」と前置きし、二〇〇〇年から一四年にかけて、東部アフガンのジャララバード周辺で観察された事態をもとに、干ばつの機序を推測し、ＰＭＳが採ってきた対策を述べました。そして、安定灌漑こそがアフガニスタンにとって最も効果的な「投資」であり、食糧自給がアフガン独立の基礎であるとして、灌漑事業に邁（まい）進（しん）しました。それは、「自然との関わり方において、私たち自身の将来をも暗示するもの」なのです。

中村医師は、温暖化は人間の経済活動によって引き起こされた自然の反応だと述べ、収まるまでには五〇年、一〇〇年という長い年月がかかるだろうと推測しています。「その渦中にあっても、私たちは生きていかねばなりません。人倫を重んじて自然の恩恵を見出し、とりあえず平和に生き残る現実策を模索するのが道だ」――この言葉を心に刻んで、私たちは事業を続けてまいります。